



◀一魁斎芳年画「上杉輝虎入道謙信」(明治元年作、長岡市立中央図書館所蔵)
上杉謙信(1530-1578)は、長尾景虎と称した青年期に栃尾地域で育ち、やがて上越春日山城を拠点として関東・北陸地方に勢力を伸ばし、戦国大名として飛躍した。謙信に従って各地を転戦した長岡のサムライたちが最も輝いた時代である。



▲直江兼統像(高野山龍光院、瑜祇塔壁画、小谷津任牛謹写、個人所蔵)
直江兼統(1560-1619)は魚沼地域の出身。与板城主直江氏を継ぎ、上杉謙信の後継者・上杉景勝の飛躍を支えた。兼統が大きな信頼を寄せた与板衆は、多彩な才能を発揮し、上杉景勝の会津移封、越後一揆、米沢転封などの激動に耐え、米沢藩の成立に寄与した。



▲荒屋型彫器(新潟県立歴史博物館所蔵)
川口地域の荒屋遺跡(国史跡)から出土した旧石器時代の細石刃文化の石器。



▲火焰土器(国指定重要文化財、長岡市馬高縄文館所蔵、撮影:小川忠博)
昭和11年(1936)の大晦日、長岡市関原町の馬高遺跡(国史跡)で発見、命名されたと伝える。4つの大ぶりの突起(鶏頭冠)からその名がつけられた。類似の土器は「火焰型土器」と呼ばれ、信濃川流域を中心に分布する。



▲八幡林遺跡から出土した木簡と墨書土器(新潟県指定文化財、長岡市教育委員会所蔵)
和島地域にある八幡林遺跡は古志郡の役所跡(官衙)で、多数の木簡が出土した。「沼垂城」とかかれた木簡(写真左上)は、『日本書紀』に記された「淳足柵」(柵は蝦夷に対する防御拠点)が実在することを証明し、古代史上の大きな発見となった。



▲寺泊沖から揚陸された貝殻付珠洲焼の壺(個人所蔵)
上杉謙信や直江兼統が活躍した時代、中国産の陶磁器類や能登半島でつくられた珠洲焼などが日本海を經由してさかんに運ばれ、長岡地域の遺跡でも広く発見されている。寺泊などの海の玄関口、信濃川沿いの津などを通じて地域の個性的な文化が強く結びついていた。

火焰土器・八幡林遺跡・長尾景虎…… 長岡の個性が生まれる

長岡の地に人類が姿をみせる遙か一万六千年以前の旧石器時代。約五千年前の縄文時代には個性豊かな火焰土器の文化が華開いた。長岡の古代・中世。信濃川、日本海の港泊などさまざまな品物が行き来し、人びとの交流がさかんとした。青年時代の上杉謙信は長岡で育ちやがて戦国の雄となる。直江兼統はその意志を継ぐ。

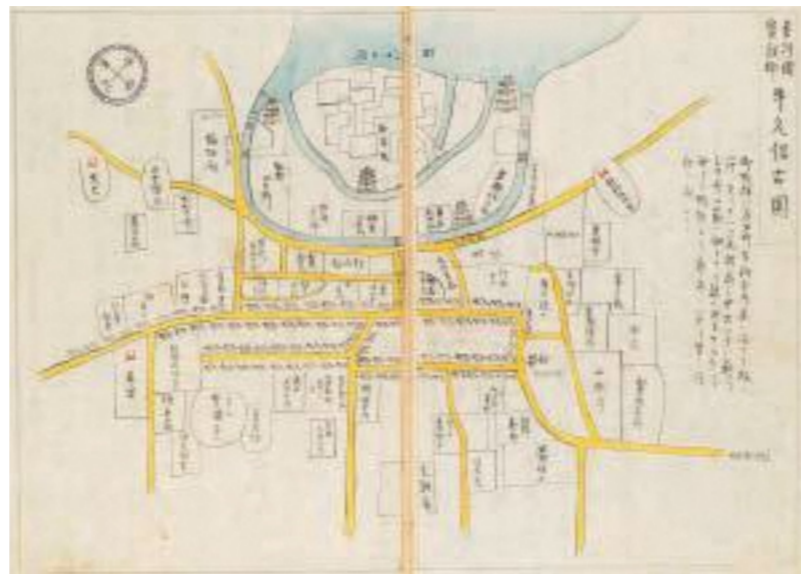
太古から続く長岡人の営み

氷河期のまだ寒冷な気候が続いた旧石器時代終末、信濃川・魚野川の合流地点にあたる荒屋遺跡には、サケなどの獲物を求めて、旧石器人たちが頻りに訪れていた。
やがて気候が温暖化して縄文時代に入り、馬高・三十稲場遺跡にみられるように、縦穴住居をつくって安定した大規模なムラを営むようになる。
その後、弥生・古墳時代を経て、奈良・平安時代に移り変わると、海岸部の八幡林遺跡に拠点となる官衙(役所)が設置されるなど、古志郡から三島郡にわたる長岡の輪郭が形づくられた。
鎌倉・南北朝・室町(戦国)時代と時は移り、上杉謙信(長尾景虎)が登場する。謙信のもとで結束した長岡のサムライたちは、寡黙で信義に厚く、戦国最強と賞賛され、長岡人の名声を天下にとどろかせた。

西暦	和暦	記事
一六〇〇年前		細石刃文化拡大(荒屋遺跡)
五〇〇〇年前		火焰土器誕生(馬高遺跡・岩野原遺跡)
三〇〇〇年前		東北地方から亀ヶ岡文化伝播(藤橋遺跡・朝日遺跡)
紀元前三世紀ころ		米づくり伝播(尾立遺跡)
三世紀ころ		環濠集落が盛行(横山遺跡)
四世紀ころ		古墳の造営(大久保古墳群・下小島谷古墳群・麻生田古墳群・大萱場古墳)
六四七・六四八	大化三・大化四	淳足柵・磐舟柵設置
六八九	大化三	越前が越前・越中・越後に三分割
六九二	持統三	横滝山廃寺がこのころ造営
七世紀末ころ		頸城・魚沼・古志・蒲原の四郡が越中国から越後に編入
七〇二	大宝二	
七二七	養老元	「沼垂城」と書かれた木簡が廃棄(八幡林遺跡)
七二四	養老八	
八六三	貞観五	越中・越後に大地震発生
九二七	延長五	『延喜式』に式内社古志郡六座(三宅神社二座・桐原石部神社・都野神社・小丹生神社・宇奈具志神社)が記載
九六七	康保四	『延喜式』に郡名「古志」・「蒲原」確認
一一〇〇	康和二	古志郡に大島荘・紙屋荘・志度野岐荘・白鳥荘・吉河荘・太田保・高波保などの荘園・国衙領を確立
一一〇〇	正治二	鎌倉幕府を批判した罪で日蓮が寺泊を経て佐渡に配流
一一二七	文永八	妙法寺の日照が置文制定
一一三五	正平十	南北朝の両軍が蔵王堂や於木野島(滝谷町)、平方原(長岡駅前)などで激戦
一一四四	文和四	世阿弥元清が寺泊を経て佐渡に配流
一一四八	永享六	上杉謙信(長尾景虎)、栃尾城から春日山城に移動
一一五〇	天文十七	上杉謙信(上杉政虎・輝虎)のもとで栃尾の本庄氏、与板の直江氏、刈羽の斎藤氏、長岡の長尾氏・河田氏らが活躍
一一五七	天正五	上杉謙信の急死により上杉景勝と上杉景虎が後継者の座を争闘(御館の乱)
一一五八	天正六	
一一八〇	天正八	上杉景勝・直江兼統らが国づくりを推進
一一九七	慶長二	



▲牧野康成像（「徳川十七将ノ図」部分、牧野家旧蔵、長岡市立中央図書館所蔵）
牧野康成（1555-1609）は、初代長岡藩主牧野忠成の父である。三河国牛久保城主から、徳川家康に従い、上野国大胡城（現前橋市大胡）の城主となり、譜代大名牧野家の礎を築いた。名前の「康」は、家康から拝領したものと伝えられ、家康の厚い信頼がうかがえる。市指定文化財



▲「参河国宝飯郡牛久保古図」（『懐旧雑誌』、長岡市立中央図書館文書資料室所蔵）
初代長岡藩主牧野忠成（1581-1654）が生まれたころ、牧野氏は、三河国牛久保城（現愛知県豊川市）を本拠としていた。長岡藩筆頭家老稲垣氏や次席家老山本氏など、長岡藩士の多くのルーツも牛久保にある。現在も豊川市では、牧野氏の威徳を大切に伝えている。

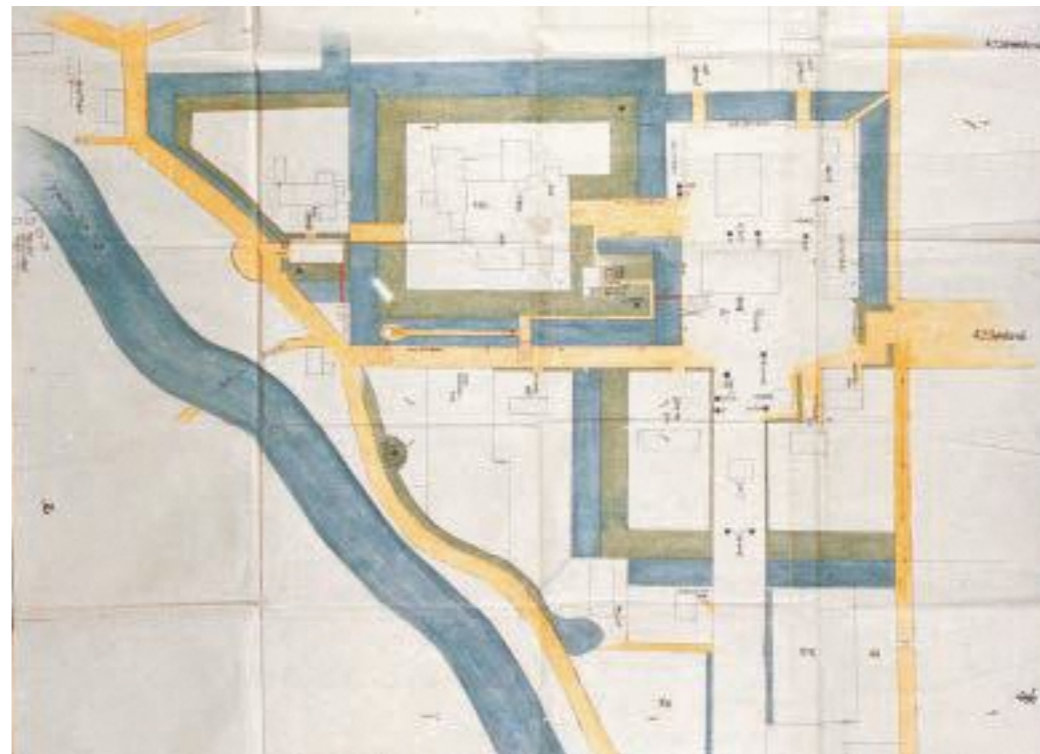


▲大胡城跡（前橋市大胡、群馬県指定文化財）
初代長岡藩主牧野忠成と父康成の居城。三河国牛久保からこの地に移った牧野氏は、天正18年（1590）から元和2年（1616）まで2万石の領地を治めた。大胡城跡の西方、名峰赤城山を北に臨む古刹養林寺に忠成の父・康成の墓所があり、牧野氏の威徳を伝える。



▲長峰城跡（上越市吉川区長峰）
上野国大胡城主牧野忠成が元和2年（1616）に封ぜられた5万石余の居城。忠成は城の完成を待たずに元和4年（1618）に長岡城へと移るが、現在も壮大な土塁と空堀が残る。忠成の子で、後に与板藩祖となる牧野康成（1617-1657）はここで生まれたと伝える。

西暦	和暦	記事
一五九八	慶長三	上杉景勝、会津に移封 上杉景勝にかり堀秀治が春日山城主となり、蔵王堂城には一族の堀親良が入城
一六〇〇	慶長五	関ヶ原の戦い勃発 会津の上杉景勝・直江兼続らが越後の堀秀治軍を攻めるが敗退（越後一揆）
一六〇二	慶長七	堀親良、兄秀治の子供鶴千代に家督継承を指示
一六〇四	慶長九	このころ、堀鶴千代の後見として、堀直奇は蔵王堂に在番と伝承
一六〇五	慶長十	堀直奇が長岡城とまちづくりを推進 このころ、「長岡」という地名を初めて確認
一六〇六	慶長十一	このころ、堀鶴千代没、蔵王堂三万石は坂戸城主堀直奇に編入と伝承
一六一〇	慶長十五	堀直奇、信濃飯山に移封 松平忠輝、信濃松代から越後福島に移封され、長岡城には忠輝の重臣山田勝重が在番
一六一四	慶長十九	大坂の陣、堀直奇参戦
一六一五	慶長二十	長岡船道の船数が一〇八艘に設定
一六一七	元和二	高田藩主松平忠輝改易 堀直奇、信濃飯山五万石から越後長岡八万石へ移封され、長岡のまちづくりを推進 牧野忠成、堀直奇とともに松平忠輝の高田城二ノ丸受け取りを担当、長岡城は諏訪頼永が警衛 堀直奇、長岡・新潟の陸路・海路・河川交通網の整備を推進 堀直奇、長岡城と城下町の整備をさらに推進



▲「御宮御境内并役所向絵図」（安禅寺所蔵）
蔵王堂城が堀氏によって築かれた。中世以来、蔵王堂は、信濃川舟運の拠点として物資が集積し、また、蔵王権現を信奉する人びとが集う聖地であり、長岡地域を支配する絶好の適地だった。現在も堀と土塁の一部が残る。長岡のまちづくりの始まりの姿を偲ばせる。



▲堀直奇木像（昌福寺所蔵）
堀直奇（1577-1639）が長岡のまちづくりの基礎を築いた。「長岡」や「表町」などの地名は直奇の時代にあらわれる。直奇は、長岡と新潟を結ぶ信濃川の舟運を整備し、流通経済の振興、情報の拡散など、長岡の魅力を伝える素地を創り、牧野氏はその要諦を継いだ。



▲『温古之菜』8篇「古城跡の部」（長岡市立中央図書館所蔵）
上杉氏の会津移封により、長岡は新しい時代を迎える。しかし、時代の変換は今と変わらず劇的だった。長岡地域に伝えられたその記憶を掘り起こした、越路地域出身の大平と文次がいる。牧野氏時代の長岡以前の歴史が、大切に守り伝えられてきたのである。

長岡の近世史が始まる
新潟県の歴史は、上杉景勝の会津移封を中世と近世の境とする。領民や商人、寺社等の移動に伴い、農村や都市部の風景が激変する。耕作者のいない耕地が増えた。
堀氏はさつそく近世風の検知（検地）の実施や、信濃川を介した流通網の整備等、領内の経済基盤の整備に取り組んだが、上杉氏時代の作法との相違を近づけることに苦慮し、やがて関ヶ原の戦いの

越後版ともいえる越後一揆が発生する。戦火に焼かれた村々に再び領民を呼び戻すことや、荒廃した耕地の耕作などが喫緊の課題となった。さらに大坂の陣の軍事動員に関わる人員、銭貨や糧食などの負担も重荷となった。
堀直奇による長岡の城下町整備は、まちづくりに関わる雇用促進や、集った人びとの欲求を満たす産業の育成を促し、長岡に活気をもたらした。

堀氏から牧野氏へ
長岡開府の前夜

上杉景勝の会津移封後、越後国では小藩が分立した。長岡は堀氏一族が治め、堀直奇によって長岡城の建設とまちづくりが進められた。堀直奇と交代して長岡に入った牧野氏は、現在の愛知県豊川市の出身で、徳川家康・秀忠の信任厚い譜代大名として、群馬県前橋市大胡、上越市吉川区長峰と拠点を移し、着実に実力を蓄えていた。